

(国語科)

わかる喜び・できる嬉しさを実感できる授業づくりの探究
～「基礎・基本」の学力の定着を図り、話す・聞く力を高める～

大阪市立加美東小学校 松本京子 田原里実 佐村木航輝 橋本大樹

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校目標を「豊かな心を持って、自ら学び考え、判断するたくましい子どもを育てる」として掲げその実現を目指して様々な取り組みを進めてきた。

しかし、学習時間に座って集中して取り組むことが難しかったり、話を聞かずに自分の言いたいことを主張したりする様子が見られ、学習規律の低下とともに学級としてのまとまりが崩れることもあった。それに比例して学習意欲の低下がみられ、学力の低下に結びついている状況であった。」

そこで昨年度は、基礎・基本の定着をはかることで、落ち着いて学習に取り組むことができる子どもを育てることを目標とした。学力の向上は、子どもたちの心の安定と「学校が楽しい」という思いにつながると考えたからである。そして、他者とのコミュニケーションの基本であり、学習をする際に必要不可欠だと考えられる「聞く」ことを中心に取り組み、教科は国語科を軸に、「わかる喜び」「できる嬉しさ」を子どもたちが実感できる授業づくりを進めてきた。

その結果、1年間の様々な取り組みで、「聞く」ことについての意識が高まり、児童の様子に落ち着きが見られた。しかし、聞いたことを理解し、整理して伝え説明することに課題が残った。発達の段階に応じた「聞き取り方」と、聞いたことを「理解し活用する活動」の必要があった。

このような実態を踏まえ、本年度は「聞く」とともに「話す」力も高めることとした。話す活動にも焦点をあてることで、理解しながら聞こうとする意欲を高め、より聞く技術力を高めることができる考えたのである。そして「話す」「聞く」力の向上とともに、学習に集中し意欲的に取り組む姿を目標に、研究を進めた。

2. 研究の趣旨

指導法の研究を深め、児童全員が「わかった!」「できた!」と笑顔になる授業づくりとともに、基礎・基本の学力を向上させることにも引き続き取り組んだ。そのために「学力」とは何かを教職員で考え、「教科学習を活用し社会で幸せに生きる力」と共通理解した。また、学力の向上には、粘り強さや自尊心など目に見えない力が土台として存在すると思った。

そこで、「教科の学習」と「学びに向かう力・姿勢の指導・支援」という2つの側面を意識しながら実践を重ねることとした。

3. 研究の概要

① 「話す」「聞く」力を高めるための取り組み

いろいろな教科・領域その他の活動の中で「話す」「聞く」力を意識した取り組みを行う。

② 子どもたちが「わかる」「できる」を実感できる授業の指導法の研究

授業研究において、より効果的な指導法の研究を行う。

ア. 指導方法の工夫

目標の明確化・ワークシート・ノート指導・評価方法・ICT活用

個に応じた指導法の工夫（習熟度・少人数授業の活用）等

イ. 「授業力」の磨き合い

授業評価シートの活用・授業討議会での視点をしぼった意見交流・自主研修会の充実

ウ. 子どもの変容を見つめる視点の徹底

学習への困り感がある児童の様子や変容の交流・特別支援担当との計画段階からの連携

③ 基礎・基本の学力を定着させる取り組み

「話す」「聞く」力を伸ばすための土台とし、生活全般の側面から児童の学力向上を目指す。

ア. 学習の土台作り

「学びの基本」の掲示・活用

イ. 多角的な取り組み

部会（教務部・健康教育部・生活指導部・人権教育部・研修部）の活用・保護者との連携

ウ. 朝学習の充実と学習支援の工夫

エ. 自主学習週間「パワーアップ週間」の取り組み（各学期1回）

4. 研究の成果と今後の課題

○ 「聞き取る」力が向上した。

年間を通していろいろな教科・領域その他の活動の中での「話す」「聞く」力を意識した取り組みにより、話したり聞いたりすることに対して苦手意識が減り、集中して話を聞き、行動することにつながった。また、ワークシートやメモを活用したことで、どのように聞き取ったらいいかわかり、聞き取る力が向上した。

○ 「話す」意欲が向上した。

昨年度の取り組みで「話したら聞いてくれる」という安心感が児童に定着していた。そのことから意欲的に話せるようになり、聞き取れた自信から、発表の挙手が増えるなど「話す」活動への意欲がより増した。話型の掲示やカードなどの活用は自信をもって話すことに効果的であった。

○ 聞き取ったことを活用できるようになった。

「聞き取る」力の向上により、さらにそれを活用し、自分の感想や意見を発表することができるようになってきた。そのため、様々な学習場面や行事の中で話したり聞いたりする時間を設定することができ、主体的に活動する場面が増えてきている。

○ 学ぶ意欲が向上した。

朝の学習や学習支援の工夫をしたことで、すぐ「わからない」とあきらめず、質問して再挑戦する根気強さが見られるようになった。また、パワーアップ週間での自主的な学習は、自分の力を自分で伸ばしていこうという意識を高めることができた。

・ 教育活動全般での「話す」「聞く」力の指導の在り方を工夫する。

話型を提示したり、ワークシートを工夫したりすることで、意欲的に話したり聞いたりすることができるようになってきたが、普段の生活の中で聞き落としがあったり、こども同士で問題を解決するのが困難であったりする場面はまだある。

引き続き、国語科だけでなく、他の教科領域や日常生活の中でも、指導者から言葉に対する意識を高め、しっかりと話したり聞いたりすることの大切さを伝えながら指導していく必要がある。例えば、日常生活で自分の行動の理由をしっかりと聞き取ったり、算数の学習において、適切に語句を使いながら説明をしたりするなどの指導が考えられる。

・ 自ら学ぼうとする意欲の向上を図る。

「できた」「わかった」と子どもが笑顔になる授業を目指して研究してきた結果、授業の展開や課題に合った学習の内容については効果があった。しかし、発問や児童への問い直しなどの指導者の効果的な支援が不十分であった。何をどのように学ばせたいのかという視点を常にもち、より授業力の向上を目指したい。

本年度は学力を定着させるため教科学習だけでなく、態度の育成を目指した土台作りにも取り組んだ。子どもたちの落ち着きだけでなく、学習への意欲も高まってきた。その成果を継続するには、教職員が心をついにし、子どもたちのいろいろな側面を丁寧に支援していくことが必要である。今後も、教科学習から広がる「社会で幸せに生きる力」としての「学力」をつける、よりよい指導法について研究を深め、児童全員が「わかった」「できた」と笑顔になる授業づくりを目指していきたい。